多賀城市文化財調査報告書第61集

高崎遺跡

－ 第17次調査報告書 －

平成13年２月

多賀城市教育委員会

高　崎　遺　跡

－第17次調査報告書－

平成13年２月

多賀城市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成７年度に実施した高崎遺跡第17次調査の成果をまとめたものである。
2．発掘調査は多賀城市教育委員会が主体となり、多賀城市埋蔵文化財調査センターが担当した。
3．遺構番号は第１次調査からの連続番号である。
4．挿図中の数値（m）は標高値を示している。
5．調査区の実測基準線は「平面直角座標系X」を使用して設定した。
6．土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を参照した。
7．本書の執筆・編集は当センター職員の協力を得て武田健市が行った。また、遺物の整理、実測図作成に関しては、調査補助員である山川純一の協力を得た。
8．　調査に関する諸記録および出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
　1．遺跡の位置と地理的環境 …… 1
　2．これまでの調査成果 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯と調査経過 …… 1
Ⅲ　発見した遺構と遺物 …… 6
　1．Ⅰ・Ⅲ区の調査成果 …… 6
　2．Ⅱ区の調査成果 …… 13
Ⅳ　考　　察 …… 33
　1．遺構の年代 …… 33
　2．遺構の性格 …… 35
Ⅴ　まとめ …… 37

要　　項

遺 跡 名　　高崎遺跡　（宮城県遺跡登録番号　１８０１８）
所 在 地　　多賀城市高崎・留ヶ谷
調査面積　　１，７００㎡
調査期間　　平成８年１月５日～平成８年３月15日
調査主体　　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井茂男
調査担当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所　長　鳥山文夫
調 査 員　　武田健市・山川純一（調査補助員）

Ⅰ．遺跡の地理的・歴史的環境

1．遺跡の位置と地理的環境

高崎遺跡が所在する多賀城市は、仙台市の中心部から北東約10㎞に位置している。南西部で仙台市、北西部で利府町、北東部で塩釜市、南東部で七ヶ浜町とそれぞれ接しており、総面積は約1,966haである。

本市の地形についてみると、利府町の丘陵地帯に源を発する砂押川を境に東側の丘陵地と西側の沖積地に大きく二分することができる。丘陵地は多賀城台地と称される海抜50ｍ前後の低丘陵であり、沖積地と接する付近では大小の谷が複雑に入り組んだ地形となっている。一方、沖積地は仙台平野の北東端部に位置し、海抜３～４ｍの極めて平坦な地形を呈している。高崎遺跡はこのうちの丘陵西端部に所在しており、特別史跡多賀城廃寺跡を取り込むように南北約1.1㎞、東西約1.2㎞の範囲を占めている。

第１図　多賀城市の位置

2．これまでの調査成果

本遺跡では、これまで36次におよぶ調査を実施しており、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構や遺物を発見している。その成果の概要については第３図のとおりである。

Ⅱ．調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、高崎二丁目地内の宅地造成に係る事前調査として実施したものである。平成７年10月20日、渡良建設株式会社（当時）から同地区における開発計画案および埋蔵文化財に係る発掘調査の依頼が提出された。対象区内では、平成２年度の試掘調査において中世の溝跡や小柱穴、古代の遺物包含層などを発見しており、これらの遺構が周辺に展開している可能性が想定されることや、同地区の大部分が掘削して造成される計画が提示されていたことから事前調査で対応する旨を回答し、11月30日に発掘調査委託契約を締結した。

発掘調査は翌平成８年１月５日から開始した。調査に際して便宜上、東部の平坦面をⅠ区、北部の緩斜面をⅡ区、急激に窪んでいる中央部から南半部をⅢ区とした。小雪が降る中、調査器材を搬入す

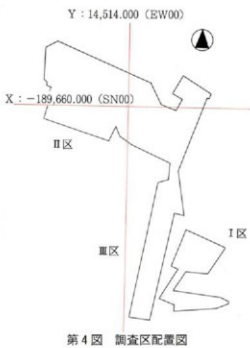
第２図　調査区位置図

番号	調査次数（年度）	発見遺構	出土遺物
1	第1次（昭和55年度）	古代：掘立柱建物、合口甕棺	
2	第2次（昭和56年度）		瓦
3	第3次（昭和57年度）	古代：溝、土壙、環壕	
4	第4次（昭和60年度）	古代：柱列、溝、土壙	瓦、鞴字硯
5	第5次（昭和60年度）	古代：掘立柱建物、竪穴住居 中世：土壙	灰釉陶器、円面硯 無釉陶器鉢
6	第6次（昭和61年度）	古代：掘立柱建物、竪穴住居、柱列、井戸、合口甕棺 中世：溝、井戸、土壙	墨書土器、瓦 青磁碗
7	第7次（昭和63年度）	古代：掘立柱建物、溝、土壙 近世：解體、地鎮遺構	瓦 輪宝墨書土器、陶器、古銭
8	第8次（平成3年度）	古代：掘立柱建物、井戸、道路 中世：掘立柱建物、溝、土壙 近世：道路	墨書土器 無釉陶器壁・鉢
9	第9次（平成4年度）	古代：竪穴住居、溝、土壙	陶器
10	第10次（平成5年度）	古代：掘立柱建物、竪穴住居、工房、井戸	灰釉陶器鉢、鉄製鉄、漆紙文書、羽口、鉄造剥片
11	第11次（平成6年度）	古代：竪穴住居、石組暗渠、灯明皿廃棄場 中世：溝	灯明皿、青磁 瓦質土器鉢
12	第12次（平成6年度）	古代：掘立柱建物、竪穴住居 中世：掘立柱建物、井戸	瓦、円面硯 かわらけ
13	第13次（平成6年度）		
14	第14次（平成6年度）	古代：溝	瓦
15	第15次（平成6年度）	古代：竪穴住居	
16	第16次（平成7年度）	古代：掘立柱建物、竪穴住居 近世：井戸	円面硯、灯明皿
17	**第17次（平成7年度）**	**本報告書**	
18	第18次（平成7年度）	縄文：包含層	石鏃
	第19次（平成8年度）	古代：掘立柱建物、竪穴住居 中世：掘立柱建物	石器 青磁、白磁
19	第20次（平成8年度）	古代：掘立柱建物	
20	第21次（平成8年度）	古代：竪穴住居	瓦
21	第22次（平成9年度）	古代：竪穴住居	赤磁き土器
22	第23次（平成9年度）	中世：平場、柱穴	施釉陶器花瓶・水滴
23	第24次（平成9年度）	土器	
24	第25次（平成9年度）	古代：掘立柱建物、竪穴住居	墨書土器
	第26次（平成10年度）	近世：墓	施釉陶器、漆器、古銭
25	第27次（平成10年度）	古代：柱穴	
26	第28次（平成10年度）	柱列、溝	
27	第29次（平成10年度）	古代：竪穴住居	
	第30次（平成11年度）		
28	第31次（平成11年度）	古代：土壙	
29	第32次（平成11年度）	古代：掘立柱建物、土壙	漆器
30	第33次（平成11年度）		
31	第34次（平成11年度）		
	第35次（平成11年度）		
32	第36次（平成11年度）		
33	試掘調査（平成12年度）	中世：溝跡	系曰

第3図　高崎遺跡調査区一覧

るとともに、Ⅰ区より重機による表土除去を開始した。現表土下25～30cmで浅黄色粘質土層があり、その上面で竪穴住居と思われる方形のプランとそれよりも新しい溝跡を確認した。1月8日、Ⅱ区の表土除去を開始した。Ⅰ区同様、浅黄色粘質土上面で竪穴住居跡や小柱穴、溝跡などの遺構を確認した。

その後、大雪に見まわれながらもⅠ区、Ⅱ区の精査を行い、1月16日までには概ね遺構の分布状況を把握した。その結果、Ⅱ区では西半部に竪穴住居跡が3軒認められ、中央部から東部には円形・楕円形の小柱穴を主体とする掘立柱建物跡が分布することが判明した。一方、Ⅰ区では掘削される範囲に限って調査区を設定したため、遺構の規模、性格等を明確にするには至らなかった。そこで開発業者に調査区の拡張について打診したところ快諾を得たため、1月17日よりⅠ区東部の表土除去を行い遺構の検出を行った。さらに、平行してⅢ区の表土除去および遺構検出作業も開始した。精査の結果、Ⅰ区では竪穴住居跡2軒のほか、溝跡、土壙などを発見し、Ⅲ区では北半部に溝跡や柱穴が認められた。



第4図　調査区配置図

1月18日、Ⅱ区の遺構検出状況の写真撮影を行い、東部のＳＤ1188・1189溝跡や西部のＳＤ1194溝跡の埋土除去を開始した。また、実測図作成用に、国土座標Ｘ：－189,660.000（＝ＳＮ：00）、Ｙ：14,514.000（＝ＥＷ：00）を原点とした3ｍ×3ｍのグリットを設定し、1月23日より1／20および1／100平面図の作成を行った。1月29日よりＳＢ1195～1200・1212掘建柱建物跡柱穴の断割り調査を開始し、1月31日にはＳＩ1186竪穴住居跡、2月9日にはＳＩ1202・1203竪穴住居跡の埋土除去を開始した。2月29日、Ⅱ区における調査が概ね終了したため、全景写真撮影を行い、3月4日より竪穴住居跡床面の厚さやその下層の状況を確認する作業、および東部で検出したＳＫ1228土壙の埋土除去を行なった。

その結果、ＳＩ1202竪穴住居跡床面除去後にＳＩ1244竪穴住居跡を確認し、ＳＫ1228土壙埋土除去後にＳＩ1246竪穴住居跡を検出した。一方、Ⅰ・Ⅲ区については、1月23日に遺構検出状況の写真撮影を行った。2月1日よりⅠ区で検出したＳＤ1206溝跡の埋土を除去し、2月9日からはそれよりも古いＳＩ1208・1211竪穴住居跡の埋土除去を開始した。2月16日、当初提示されていたⅠ・Ⅲ区に関する開発計画案が変更されたことを受け、道路部分となるⅢ区を南側に拡張した。また、Ⅰ区は掘削範囲から完全に外れたものの、現在調査を行っている竪穴住居跡に関しては住居内埋土を除去し床面を検出した時点で一週の調査を終了することで了承を得た。2月27日、ＳＩ1208竪穴住居跡埋土3層上面で、それよりも新しいＳＩ1235竪穴住居跡を検出した。土層観察用に設定したベルトで確認した結果、当初ＳＩ1208竪穴住居跡の1・2層と考えていたものが、ＳＩ1208・1235竪穴住居跡全てを覆う堆積層であり、ＳＩ1235竪穴住居跡はＳＩ1208竪穴住居跡埋土3層より掘り込まれていたことを確認した。また、3月11日には、ＳＩ1208・1235竪穴住居跡の東側を巡るＳＤ1214溝跡がＳＩ1211竪穴住居跡北東隅より延びる外延溝であることが明らかとなった。Ⅲ区では、2月23日よりＳＤ1230溝跡などの埋土除去を開始した。Ⅰ・Ⅱ区と比べ遺構の密度が少ないこともあり、3月7日には概ね調査を終了した。3月13日、全体の調査がほぼ終了したため、現地にて開発業者に対して発見した遺構の概要説明を行った。3月14日、Ⅰ区の全景写真を撮影するとともに、Ⅱ区のＳＩ1246竪穴住居跡の補足調査を行った。3月15日、小雨の降るなか発掘器材の搬出を行い、本調査の一切を終了した。

W15
EW00
E15
N15
S N00
S15
S30
S45
S60
S D1210
S D1194
S B1187
S I 1188
S I 1202
S B1212
S I 1203
S D1209
S X1228
S B1196
S B1195
S B1197
S B1207
S B1200
S B1198
S B1199
S D1232
S D1230
Ⅱ区
Ⅲ区
S X1221
S D1206
S I 1235
S I 1208
S D1214
S I 1211
S D1216
Ⅰ区
0
10m

第5図　調査区全体図

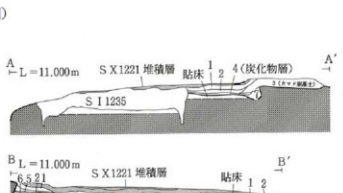
Ⅲ　発見した遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡９棟、柱列跡３条をはじめ土壙、溝跡、柱穴などを発見した。また、これらの遺構からは土師器、須恵器、赤焼き土器、施釉陶器、無釉陶器、古銭、鉄製品、石製模造品などの遺物が出土している。以下、調査区ごとに主な遺構と遺物について記載する。

１．Ⅰ・Ⅲ区の調査成果

【ＳＩ1208竪穴住居跡】（第６・７・８・９図）

Ⅰ区北半部の地山上で発見した竪穴住居跡である。ＳＩ1235竪穴住居跡、ＳＤ1206・1216溝跡、ＳＫ1245土壙と重複し、そのいずれよりも古い。住居中央付近がＳＩ1235に、北西隅がＳＤ1216により破壊されている。平面形は方形であり、規模は東辺約3.8ｍ、南辺約4.2ｍである。方向は南辺で計ると、発掘基準線に対して東で約８度北に偏している。残存する壁高は東辺で12～26㎝であり、ほぼ垂直に立ちあがる。堆積土は７層に細分することができる。１層が灰黄褐色土、２～７層が褐色土であり、床面直上の４層に焼土及び炭化物が多量に混入する。床面は褐色粘質土に地山が粒状に混入する貼床であり、南側から北側に向かって緩やかに傾斜している。カマドは住居東辺北よりに付設されており、規模は燃焼部最大幅約40㎝、奥行き約55㎝、残存する側壁高は16～18㎝である。煙道は長さ約120㎝、幅約20㎝、深さ14～18㎝ほどが残存している。底面は住居外に向かって緩やかに傾斜している。周溝は削平された北西隅以外すべてで確認している。規模は上幅20～40㎝、下幅8～20㎝である。床面からの深さは６～16㎝であり、底面は南東から北西に向かって傾斜している。

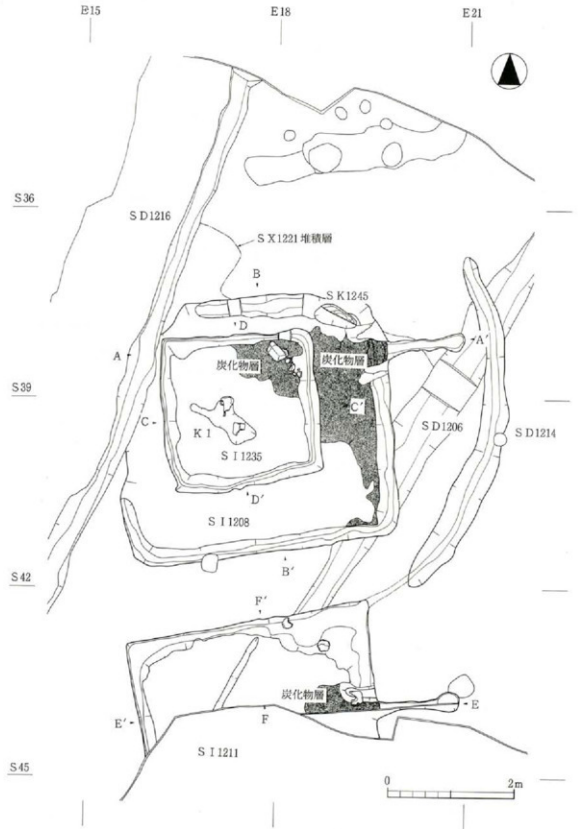


第６図　ＳＩ1208竪穴住居跡断面図

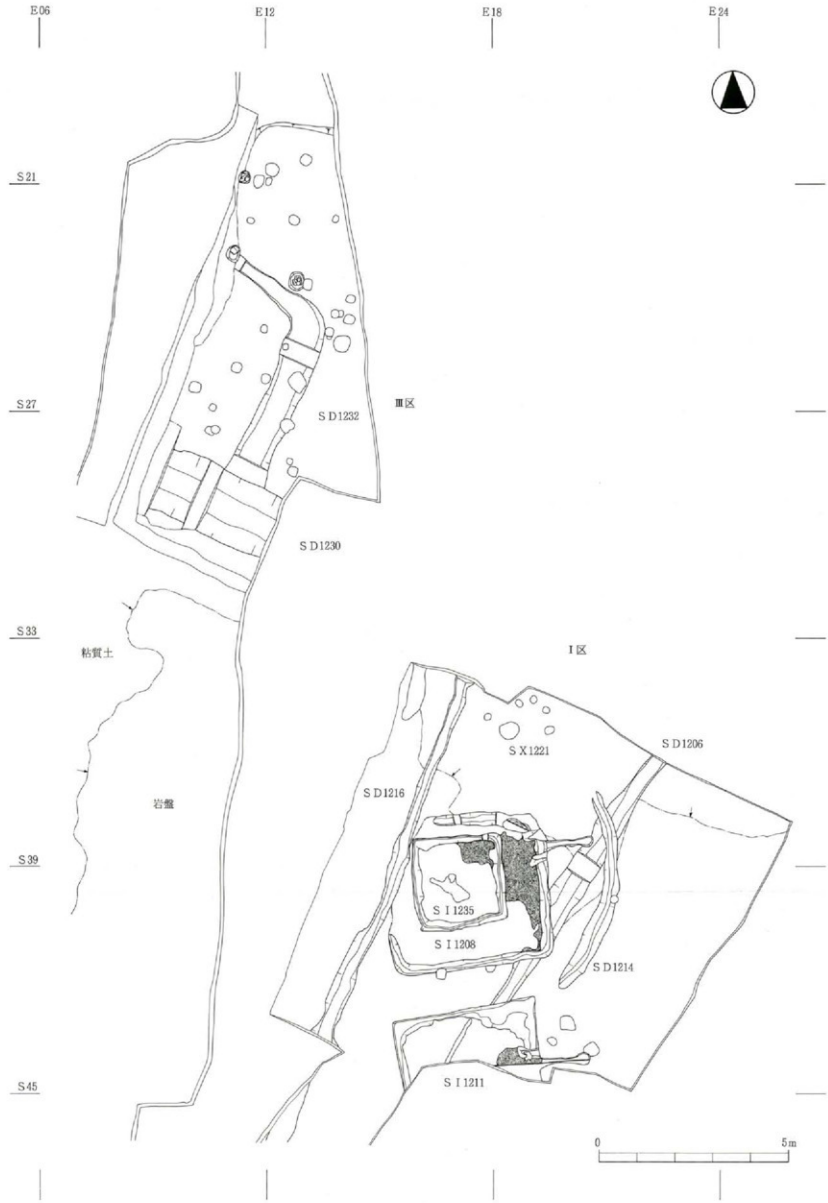
遺物は、周溝内から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、堆積土４層から土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕が出土している。土師器では調整が明らかなものはすべて非ロクロ調整のものである。須恵器杯では底部の切り離しが明らかなものはすべてヘラ切りのものであり、底部あるいはその周縁に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリなどの再調整が施されるものが多い。

【ＳＩ1235竪穴住居跡】（第７・８・10・11図）

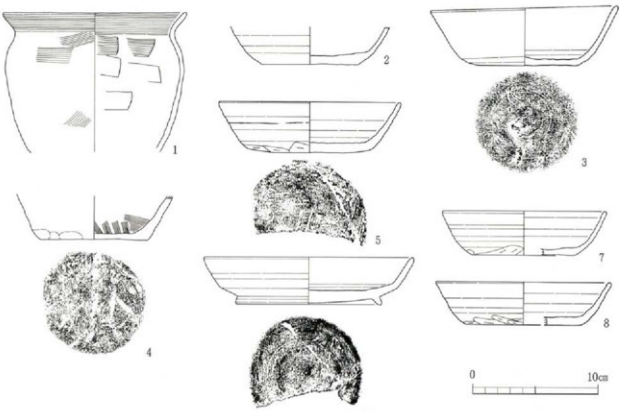
Ⅰ区北半部のＳＩ1208竪穴住居跡上面で発見した。残存状態は良好であり、規模は東辺約2.3ｍ、南辺2.4ｍ、西辺2.4ｍ、北辺2.4ｍである。方向は南辺で計ると、発掘基準線に対して東で約９度北に偏している。残存する壁高は東辺で49～51㎝であり、ほぼ垂直に立ちあがる。堆積土は７層に細分することができる。１・２・５層が灰黄褐色土、３・４層がにぶい黄褐色土、６層が黒褐色粘質土、７層が褐色粘質土であり、６・７層に焼土及び炭化物が多く混入している。床面は褐灰色粘質土に地山小ブロックが混入する貼床である。東側でやや凹凸がみられる以外はほぼ平坦である。また、北東隅では床面上に炭化物が多量



第7図　S I 1208・1211・1235 竪穴住居跡ほか平面図



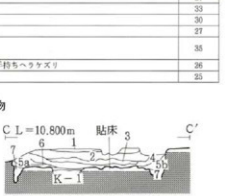
第8図　Ⅰ・Ⅲ区遺構配置図



番号	種別	器位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	土師器・甕	胴	(14.4)			非ロクロ 【内面】口縁部ヨコナデ、体部ナデ 【外面】口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	31
2	須恵器・杯	胴			7.6	【底部】ヘラ切り	37
3	須恵器・杯	胴	14.8	8.0	4.5	【底部】ヘラ切り	33
4	土師器・甕	1～4		8.6		非ロクロ 【底部】木葉痕	30
5	須恵器・杯	1～4	(14.4)	(9.6)	4.0	【底部～体部下端】手持ちヘラケズリ	27
6	須恵器 高台付杯	1～4	(16.6)	11.6	3.8	【底部】回転ヘラケズリ	35
7	須恵器・杯	1～4	(12.8)	(8.2)	3.5	【体部下端】手持ちヘラケズリ 【底部】ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	26
8	須恵器・杯	1～4	(13.8)	(9.0)	3.4	【底部～体部下端】手持ちヘラケズリ	25

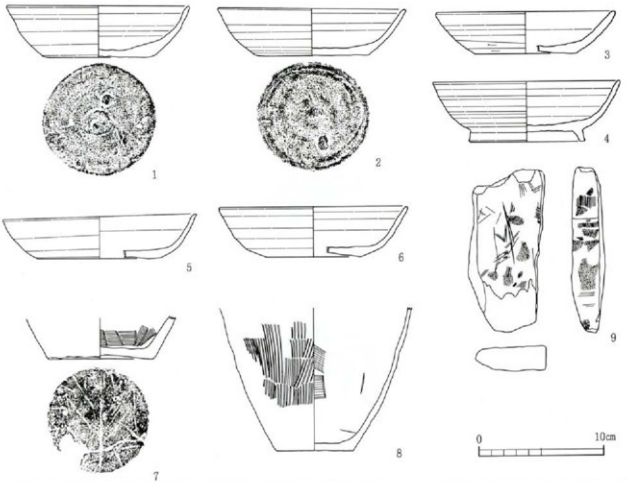
第9図 S I 1208竪穴住居跡出土遺物

に堆積している部分を確認した。周溝は住居内を全周しており、規模は上幅15～30cm、下幅4～6cm、床面からの深さは20～28cmである。堆積土は暗褐色粘質土を主体とし、地山小ブロックが混入する。底面は南東から北西に向かって緩やかに傾斜している。住居中央部の床面上ではK-1土壙を検出した。平面形は不整形であり、規模は長辺90cm、短辺30cmである。



第10図 S I 1235竪穴住居跡断面図

遺物は、床面直上から須恵器杯、漆紙、K-1土壙上面から須恵器杯、台石、周溝内から土師器杯・甕、須恵器杯、堆積土から土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕、砥石、台石が出土している。土師器では調整が確認できるものはすべて非ロクロ調整のものである。須恵器杯では底部の切り離しが明らかなものはヘラ切りのものが主体であるが、糸切り後回転ヘラケズリ調整が施されたものも1点ある。

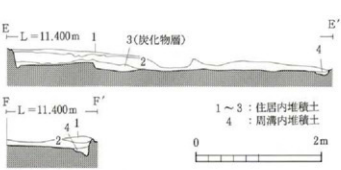


番号	種別	器位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	須恵器・杯	床直上	14.4	8.7	4.1	【底部】ヘラ切り	5
2	須恵器・杯	K－1	15.0	9.0	3.8	【底部】ヘラ切り	6
3	須恵器・杯	1－1	(14.2)	(8.0)	3.4	【底部～体部下端】回転ヘラケズリ	42
4	須恵器・高台付杯	1－2	(14.7)	(9.0)	4.8	【底部】ヘラ切り	43
5	須恵器・杯	1－1	(15.3)	(9.8)	3.4	【底部】ヘラ切り	40
6	須恵器・杯	1－1	(14.8)	(7.6)	4.0	【底部】ヘラ切り	41
7	土師器・甕	1－1		8.6		赤ロクロ 【内面】ヘラナデ 【底部】木葉痕	45
8	土師器・甕	1－1		(6.2)		赤ロクロ 【内面】ヘラナデ 【外面】ハケメ	46
9	砥石	1－1					91

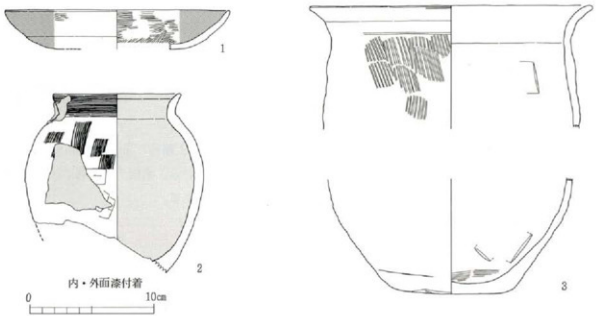
第11図　ＳＩ1235竪穴住居跡出土遺物

【ＳＩ1211竪穴住居跡】（第７・８・12・13図）

Ⅰ区北半部の地山面で発見した竪穴住居跡である。ＳＤ1206溝跡と重複し、それよりも古い。調査区の範囲上、北半部のみの確認にとどめたが、残存状態は良好である。平面形は方形であり、規模は北辺約3.7ｍ、東辺2.4ｍ以上である。方向は北辺で計ると、発掘基準線に対して東で約11度北に偏している。残存する壁高は北辺で16～21㎝であり、ほぼ垂直に立ちあがる。堆積土は３層



第12図　ＳＩ1211竪穴住居跡断面図



番号	種別	器位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	土師器・杯	外延端	(18.0)			非ロクロ【内面】ヘラミガキ・黒色処理　【外面】ヘラミガキ・黒色処理	49
2	土師器・甕	胴　部	10.2			非ロクロ【内面】全面に漆付着　【外面】体部ハケメ、口縁部ヨコナデ、体部に漆付着	1
3	土師器・甕	胴　部	(22.4)		9.0	非ロクロ【内面】体部ヘラナデ　【外面】体部ハケメ、口縁部ヨコナデ	38

第13図　ＳＩ1211竪穴住居跡出土遺物

に細分することができる。１・２層がにぶい黄褐色土、３層が暗褐色土であり、３層に焼土及び炭化物が多く混入する。床面は地山を直接床としており、おおむね平坦である。カマドは住居東辺に付設されている。北側の側壁を検出したのみであるため正確な規模は明らかではないが、南側の側壁を北側のそれと対称の位置に想定すると、燃焼部の最大幅約50cm、奥行き約45cmとなる。残存する北側壁高は16～18cmであり、側壁の中央付近には焼土塊が埋め込まれていた。煙道は長さ約130cm、幅10～25cm、深さ16～30cmであり、先端部には径約30cmの煙出しピットが認められた。底面は住居外に向かって緩やかに傾斜している。周溝は未調査の南辺以外で確認している。規模は上幅15～20cm、下幅8～10cmであるが、北東および北西隅では住居内に広く入り込んでいる。床面からの深さは７～12cmあり、北辺でみると中央付近が最も浅く、北東隅にむかって傾斜している。なお、本住居跡の周溝は北東隅で住居外にトンネル状に掘り込まれており、ＳＤ1214溝跡と連結している。したがって、ＳＤ1214溝跡は本住居跡の外延溝であると理解できる。ＳＤ1214溝跡は、ＳＩ1208・1235竪穴住居跡の東側を巡るように掘り込まれており、規模は上幅25～50cm、下幅８～14cm、深さ45～52cmである。壁は鋭く立ち上がり、底面は南側から北側に向かって傾斜している。

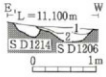
遺物は、周溝内から土師器甕、堆積土から土師器杯・甕、外延溝から土師器杯が出土している（第13図）。土師器では調整が確認できるものはすべて非ロクロ調整のものである。このうち北東部の周溝埋土より出土した甕(2)の内外面には多量の漆が付着していた。

【ＳＤ1206溝跡】（第８・14図）

Ｉ区中央部で発見した南北方向の溝跡である。ＳＩ1208・1211竪穴住居跡と重複し、それよりも新しい。規模は長さ9.4ｍ以上、上幅40～75cm、下幅25～40cm、深さ18～24cmである。方向は発掘基準線に対して、

北で約32度東に偏している。堆積土は2層に区別することができる。1層がにぶい黄褐色土、2層が暗褐色土であり、共に炭化物、焼土、地山ブロックを多く含む。

出土遺物は無釉陶器甕がある。体部の破片であるが、破損部分が漆で補強されている。

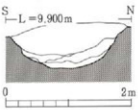


第14図　SD1206・1214溝跡断面図

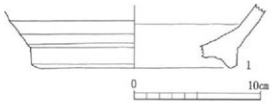
【SD1230溝跡】（第8・15・16図）

Ⅲ区北半部で発見した東西方向の溝跡である。位置や規模、方向などから、平成2年度の確認調査で発見した溝跡と一連のものであり（第39図）、長さは14m以上になる。上幅約1.7m、下幅40～60cm、深さ60～70cmであり、方向は発掘基準線に対して、西で約25度北に偏している。堆積土は4層に区別することができる。1層が黒褐色粘質土、2～4層が灰色粘土の自然堆積土である。

遺物は、無釉陶器鉢がある。



第15図　SD1230溝跡断面図



番号	種別	層位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	無釉陶器 鉢	1－1		16.2		【外面】体部ヘラケズリ	10

第16図　SD1230溝跡出土遺物

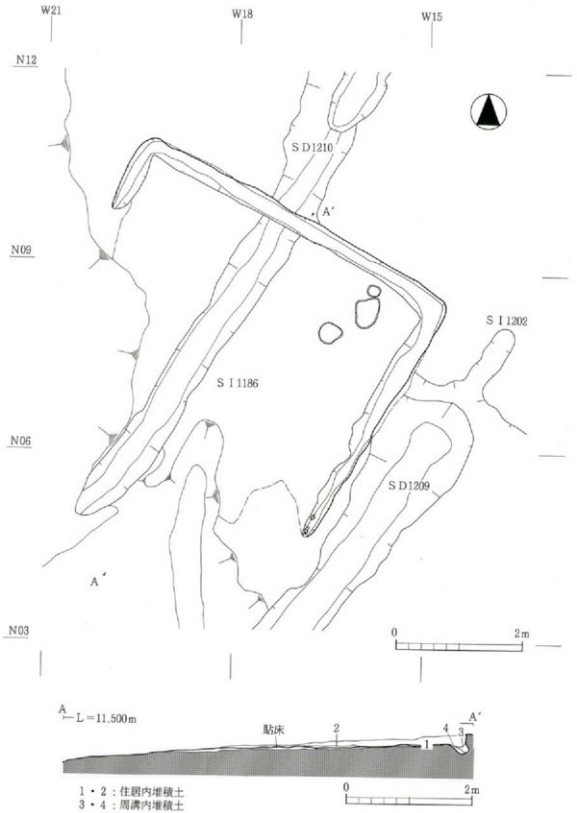
2．Ⅱ区の調査成果

【SI1186竪穴住居跡】（第17・18・19図）

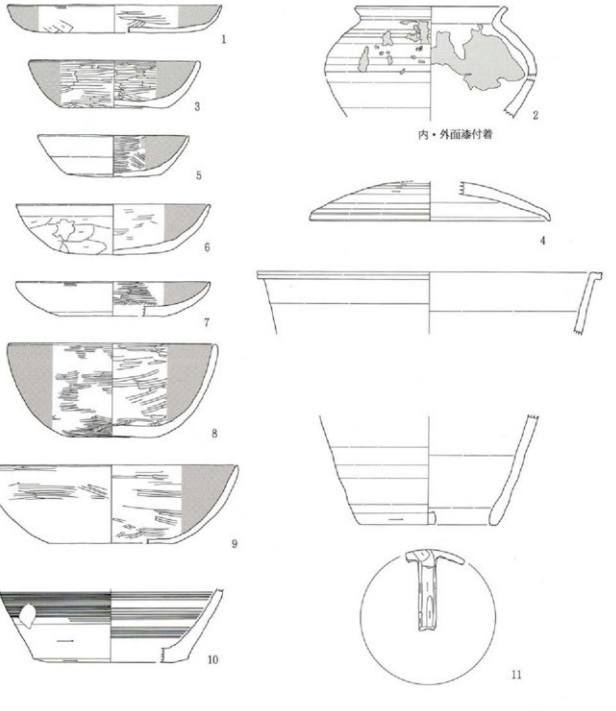
西半部の地山上で発見した竪穴住居跡である。SI1202・1244竪穴住居跡、SD1209・1210溝跡と重複し、SD1209・1210溝跡よりも古く、SI1202・1244竪穴住居跡よりも新しい。住居南半部が削平されており、残存状況は悪い。平面形は方形であり、規模は北辺約5.4m、東辺4.3m以上である。方向は北辺で計ると、発掘基準線に対して東で約29度南に偏している。残存する壁高は北辺で30～40cmであり、ほぼ垂直に立ちあがる。堆積土は2層に細分することができる。いずれも褐色土を主体としているが、2層には黒褐色土が多く混入している。床面は褐色土に地山小ブロックが混入する貼床である。やや凹凸があり、北側から南側に向かって緩やかに傾斜している。周溝は削平された南辺以外で確認した。上幅25～30cm、下幅15～25cmであり、北辺及び東辺では底面付近が外側に抉れている。床面からの深さは11～18cmであり、底面は北側から南側に向かって傾斜している。

遺物は、床面から須恵器甕、周溝内から土師器杯・甕、須恵器杯・杯蓋・壺、堆積土から土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・甑が出土している（第19図）。土師器は、調整が確認できるものは非ロクロ調整のものが大部分を占めるが、回転ハケメを施したロクロ調整のものも数点認められる。須恵器は体部の破片がほとんどであり、図化できたものは短頸壺（2）と甑（12）のみである。このうち短頸壺の内面及び外面には漆が付着している。甑は口縁部～体部上位と底部～体部下半の破片であるが、器厚・色調・胎土などから同一個体であると判断した。

第17図　Ⅱ区遺構配置図



第18図　ＳＩ1186竪穴住居跡平面図・断面図

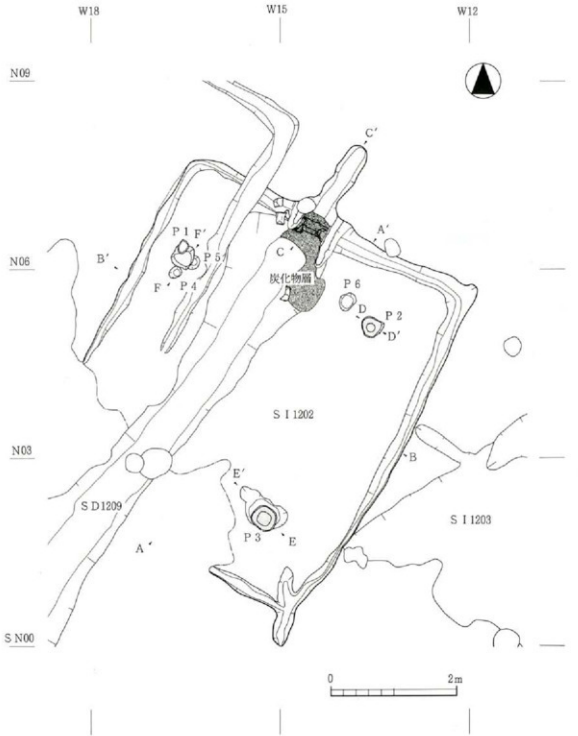


番号	種別	層位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	土師器・杯	周溝	(17.0)		2.2	赤ロクロ 【内面】ヘラミガキ・黒色処理 【外面】ヘラケズリ・ヘラミガキ・黒色処理	87
2	須恵器・壺	周溝	(11.8)			内・外面に漆付着	2
3	土師器・杯	1－2	(13.6)	(7.2)	3.8	赤ロクロ 【内面】ヘラミガキ・黒色処理 【外面】ヘラケズリ・黒色処理	7
4	須恵器・蓋	1－2	(19.0)			外面：回転ヘラケズリ	83
5	土師器・杯	1－1	(12.0)	(7.2)	3.3	赤ロクロ 【内面】ヘラミガキ・黒色処理	55
6	土師器・杯	1－1	(15.4)	(9.6)	4.0	赤ロクロ 【内面】ヘラミガキ・黒色処理 【外面】ヘラケズリ、漆付着	60
7	土師器・杯	1－1	(15.4)		2.7	赤ロクロ 【内面】ヘラミガキ・黒色処理 【外面】ヘラミガキ・黒色処理	56
8	土師器・杯	1－1	(16.6)	(6.8)	7.4	赤ロクロ 【内面】ヘラミガキ・黒色処理 【外面】ヘラミガキ・黒色処理	89
9	土師器・杯	1－1	(20.0)	(10.0)	6.2	赤ロクロ 【内面】ヘラミガキ・黒色処理 【外面】ヘラミガキ	58
10	土師器・甕	1－1			(10.0)	ロクロ 【内面】回転ハケメ 【外面】回転ケズリ、回転ハケメ	300
11	須恵器・瓶	1－1	(21.2)	(10.8)			54

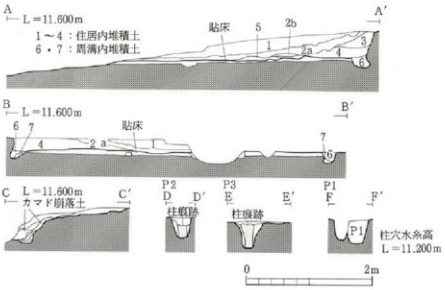
第19図　ＳＩ1186竪穴住居跡出土遺物

【ＳＩ1202竪穴住居跡】（第17・20・21・22図）

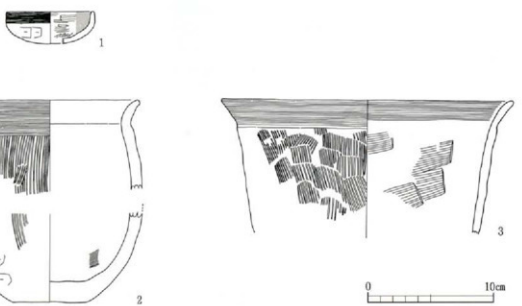
西半部の地山上で発見した竪穴住居跡である。ＳＩ1186・1203・1244竪穴住居跡、ＳＡ1220柱列跡、ＳＤ1209溝跡と重複し、ＳＩ1186竪穴住居跡、ＳＡ1220柱列跡、ＳＤ1209溝跡よりも古く、ＳＩ1203・1244竪穴住居跡よりも新しい。住居南西部が削平されているが、残存状況は良好である。平面形は方形であり、



第20図　ＳＩ1202竪穴住居跡平面図



第21図　ＳＩ1202竪穴住居跡断面図



番号	種別	層位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	土師器・杯	1～1	（6.8）		2.6	非ロクロ【内面】ヘラミガキ、黒色処理　【外面】体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	63
2	土師器・甕	1～1	（14.2）	（5.8）		非ロクロ【内面】体部ヘラナデ　【外面】体部ヘラケズリ・ハケメ、口縁部ヨコナデ	62
3	土師器・甕	床直上	（23.6）			非ロクロ【内面】体部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ　【外面】体部ハケメ、口縁部ヨコナデ	65

第22図　ＳＩ1202竪穴住居跡出土遺物

規模は北辺約4.7m、東辺約6.0mである。方向は北辺で計ると、発掘基準線に対して東で約28度南に偏している。残存する壁高は北辺で44～46cmであり、ほぼ垂直に立ちあがる。堆積土は5層に細分することができる。1・2層が暗褐色土、3層が黄褐色粘質土、4層がにぶい黄褐色土、5層が褐色土である。床面は褐色粘質土に地山小ブロックが混入する貼床である。北半部でやや凹凸があるものの、おおむね平坦である。カマドは住居北辺のほぼ中央付近に付設されている。規模は燃焼部の最大幅約50cm、奥行き約70cmで、残存する側壁高は約30cmである。なお、両側壁下には幅20～25cmほどの石が据えられており、カマド

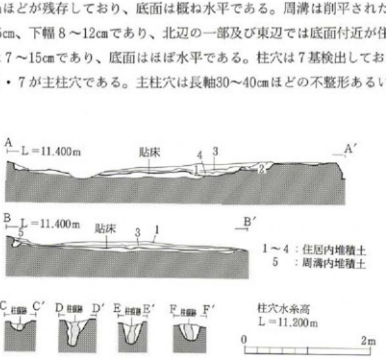
構築の際に側壁底面を補強したものと考えられる。煙道は燃焼部底面より約30cm上ったところから住居外へ延びており、長さ約110cm、幅約35cm、深さ8～10cmほどが残存している。底面は住居の外側に向かって徐々に高くなっている。周溝は削平された南西部以外のすべてで確認している。上幅20～25cm、下幅12～16cmであり、北辺及び東辺では底面付近が住居の外側に深く抉れている。床面からの深さは10～12cmであり、底面は北西側から南東側に向かって傾斜している。また、南東隅には住居外に延びる外延溝が僅かに残存している。柱穴は7基検出しており、P1、2、3が主柱穴である。P1・3は一辺約35cmの方形であり、P2は長辺約35cmの不整形である。柱痕跡はP2・3で確認しており、P2で径約14cm、P3で径約18cmである。

遺物は、床面から土師器甕、堆積土から土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。土師器は調整が確認できるものは、すべて非ロクロ調整のものである。須恵器の出土量は極めて少なく、堆積土1層から破片4点が出土するのみである。

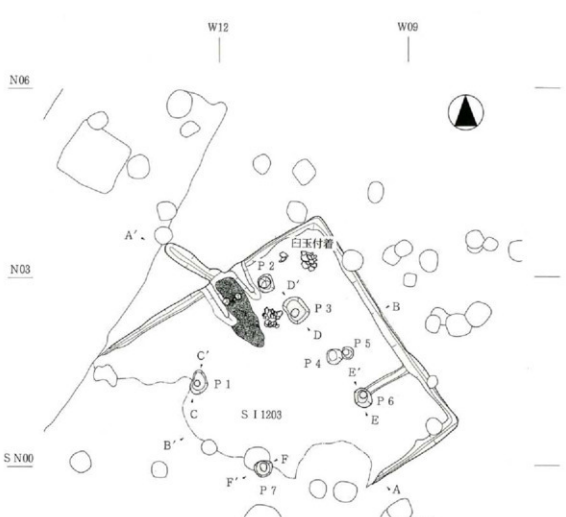
【SI1203竪穴住居跡】（第17・23・24・25図）

西半部の地山面で発見した竪穴住居跡である。SI1202竪穴住居跡、SB1212掘立柱建物跡、SK1223土壙と重複し、そのいずれよりも古い。住居南西部が削平されており、残存状況は悪い。平面形は方形であり、規模は東辺約4.0m、北辺4.1m以上である。方向は東辺で計ると、発掘基準線に対して北で約34度西に偏している。残存する壁高は北辺で12～22cmであり、ほぼ垂直に立ちあがる。堆積土は自然堆積であり、2層に細分することができる。1層が褐灰色土、2層が暗褐色土であり、2層に焼土及び炭化物が多く混入する。床面はにぶい褐色粘質土に地山小ブロックが混入する貼床であり、北側から南側に向かって緩やかに傾斜している。カマドは住居北辺やや東よりに付設されている。規模は燃焼部最大幅約40cm、奥行き約75cmで、残存する側壁高は5～9cmである。燃焼部の中央付近には側壁と直交するように凝灰岩が並べられており、支脚として使用されたものと考えられる。煙道は北辺に対して大きく西に傾いている。長さ約90cm、幅約25cm、深さ3～5cmほどが残存しており、底面は概ね水平である。周溝は削平された南西部以外で確認している。上幅15～25cm、下幅8～12cmであり、北辺の一部及び東辺では底面付近が住居外側に抉れている。床面からの深さは7～15cmであり、底面はほぼ水平である。柱穴は7基検出しており、このうち対角線上にあるP1・3・6・7が主柱穴である。主柱穴は長軸30～40cmほどの不整形あるいは同規模の楕円形であり、全ての柱穴で径14～18cmの柱痕跡を確認している。なお、北辺周溝とP6間で間仕切り溝を1条確認した。上幅約15cm、下幅約8cm、深さ約10cmであり、底面は平坦である。

遺物は、床面から土師器甕、石製模造品、堆積土から土師器杯・甕、石製模造品が出土している（第25図）。土師器では調整が確認できるものは



第23図　SI1203竪穴住居跡断面図

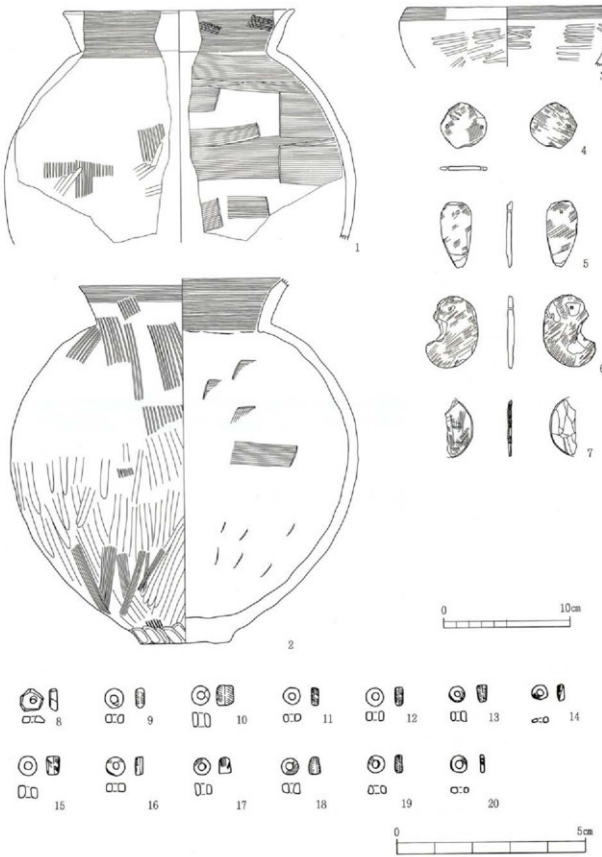


第24図　S I 1203竪穴住居跡平面図

すべて非ロクロ調整のものである。このうち床面から出土した甕は最大径が胴部中央付近にある球形のものであり、ほぼ完形のもの１点(2)、口縁部から体部にかけて残存するもの１点(1)がある。石製模造品には有孔円板１点（２）・剣１点（５）・勾玉１点（６）・臼玉32点（８～20、写真図版10－５）がある。このうち臼玉では、土師器甕の体部内面に19点が付着した状態で出土したものがある。また、それら製品のほかにも床面を中心に原石・未製品・薄片などが出土している。

【S I 1246竪穴住居跡】（第17・26・27・28図）

Ⅱ区中央部の地山上で発見した竪穴住居跡である。S K1228・1240土壙と重複し、これらよりも古い。住居南半部が削平されており、北半部もS K1228土壙によって上面の大部分が破壊されている。平面形は方形であり、規模は東辺4.9m以上、北辺4.0m以上である。方向は東辺で計ると、発掘基準線に対して北

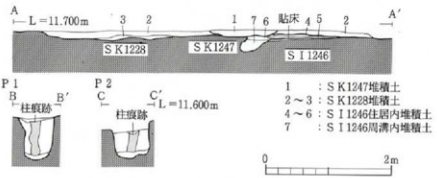


第25図　S I 1203竪穴住居跡出土遺物

ＳＩ1203 出土遺物観察表

番号	種別	層位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	土師器・甕	床直上	(18.2)			非ロクロ 【内面】体部ヘラナデ、口縁部ハケメ・ヨコナデ 【外面】体部ハケメ、ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	68
2	土師器・甕	床直上		7.2		非ロクロ 【内面】体部ヘラナデ、口縁部ヨコナデ 【外面】体部ハケメ、ヘラミガキ・ナデ、口縁部ハケメ・ヨコナデ	67
3	土師器・杯	カマド前高土	(18.8)			非ロクロ 【内面】体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ 【外面】体部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	66
4	石製模造品・円盤	床直上	最大幅：3.7、最大厚：0.3				22
5	石製模造品・剣	床直上	最大長：5.25、最大幅：2.45、最大厚：0.4				23
6	石製模造品・勾玉	1－1	最大長：5.7、最大幅：3.85、最大厚：0.5				24
7	石製模造品	1－1	円盤か				227
8	臼玉	床直上	最大径：0.65、最大厚：0.2				171
9	臼玉	床直上	最大径：0.5、最大厚：0.2				177
10	臼玉	床直上	最大径：0.5、最大厚：0.45				178
11	臼玉	床直上	最大径：0.45、最大厚：0.2				182
12	臼玉	床直上	最大径：0.5、最大厚：0.2				183
13	臼玉	床直上	最大径：0.4、最大厚：0.3				184
14	臼玉	床直上	最大径：0.4、最大厚：0.2				188
15	臼玉	床直上	最大径：0.5、最大厚：0.35				179
16	臼玉	床直上	最大径：0.5、最大厚：0.2				180
17	臼玉	床直上	最大径：0.45、最大厚：0.3				181
18	臼玉	床直上	最大径：0.45、最大厚：0.3				185
19	臼玉	床直上	最大径：0.45、最大厚：0.2				186
20	臼玉	床直上	最大径：0.45、最大厚：0.1				187

で約44度西に偏している。残存する壁高は北辺で10～17㎝であり、ほぼ垂直に立ちあがる。堆積土は自然堆積であり、３層に細分することができる。１・２層が黒褐色土、３層がにぶい黄褐色土であり、３層に焼土・炭化物が粒状に混入している。床面は褐灰色粘質土に地山小ブロックが混入する貼床である。凹凸はほとんど見られず、北側から南側に向かって緩やかに傾斜している。周溝は北辺及び東辺で確認している。上幅20～35㎝、下幅12～20㎝であり、北辺では底面付近が住居外側に抉れている。床面からの深さは12～22㎝あり、底面は北東側から南西側に向かって傾斜している。また、北辺周溝からは住居内に延びる溝跡を２条確認している。このうち南側のＤ７溝跡には30㎝×15㎝の切石６個が蓋をするように付せられていた。柱穴は６基検出しており、このうちＰ１・２が主柱穴である。いずれも不整形であり、Ｐ１が長軸約55㎝、深さ約50㎝、Ｐ２が長軸約60㎝、深さ約70㎝である。柱痕跡は共に径15㎝ほどの円形である。底面には非常に締まりのある褐灰色粘質土が均質に敷かれており、断面観察より柱はその上面に据えられていたことを確認している。また、北側の周溝底面よりＰ３・４・５、東側の周溝底面よりＰ６と40㎝×20㎝の平坦な石を検出している。Ｐ３～６の規模は径18～25㎝ほどの楕円形であり、深さは10㎝ほどである。これらは検出面および位置関係などから壁柱穴である可能性が考えられる。

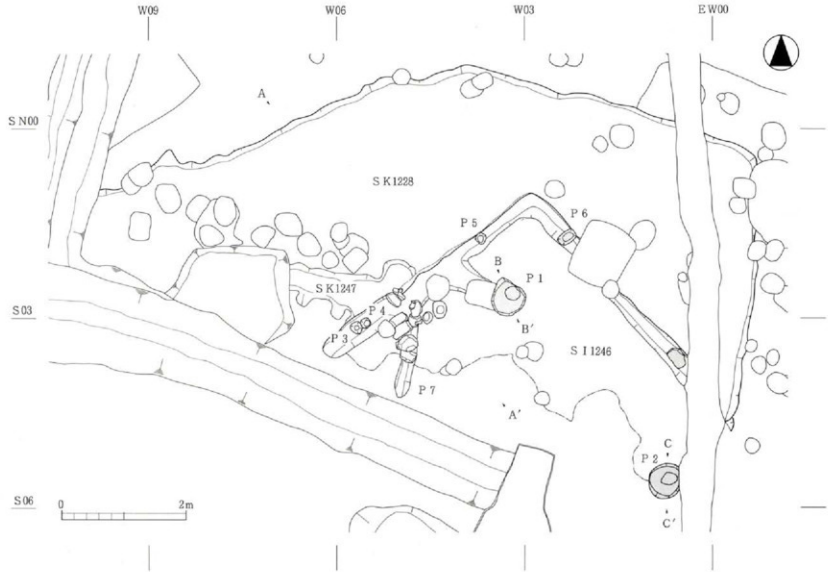


第26図　ＳＩ1246竪穴住居跡他断面図

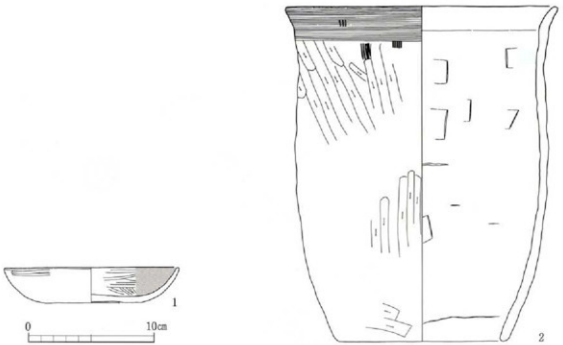
遺物は、周溝内から土師器甕、堆積土から土師器杯・甕・甑が出土している。土師器では調整が確認できるものはすべて非ロクロ調整のものである。

【ＳＩ1244】（第17図）

西半部の地山面で発見した竪穴住居跡である。ＳＩ1186・1202竪穴住居跡と重複し、それらよりも古い。



第27図　ＳＩ1246・ＳＫ1228ほか平面図



番号	種別	層位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	土師器・杯	1－1	(13.6)	(4.4)	2.8	赤ロクロ【内面】ヘラミガキ・黒色処理　【外面】ヘラミガキ	70
2	土師器・甕	1－1	(21.4)	(13.2)	26.5	赤ロクロ【体部】ヘラナデ　【外面】体部ハケメ・ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	69

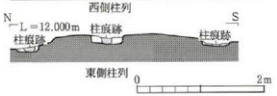
第28図　ＳＩ1246竪穴住居跡出土遺物

住居の大半が破壊されており、床面と西辺および北辺周溝が僅かに残存するのみである。平面形は方形と推測され、規模は西辺2.7m以上、北辺1.7m以上である。方向は西辺で計ると、発掘基準線に対して北で約31度東に偏している。床面は褐色粘質土に地山小ブロックが混入した貼床である。周溝は、上幅15～40cm、下幅８～12cmである。床面からの深さは６～12cmあり、底面はほぼ平坦である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ1187掘立柱建物跡】（第17・29図）

中央部の地山上で発見した南北２間、東西１間の掘立柱建物跡である。柱穴はすべて検出しており、そのうち南西隅の柱穴以外で柱痕跡を確認している。平面規模は北側柱列で3.4m、東側柱列で総長2.94m、柱間が南より1.22m・1.72mである。方向は東側柱列で計ると、発掘基準線に対して、北で約22度東に偏している。柱穴は長辺65～75cm、短辺50～60cmの方形であり、残存する深さは約10cmである。埋土は褐色粘質土を主体とし、明黄褐色地山ブロックが多量に混入している。柱痕跡は径約15cmの円形である。



第29図　ＳＢ1187掘立柱建物跡断面図

遺物は出土していない。

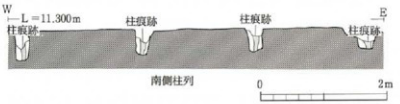
【ＳＢ1195掘立柱建物跡】（第17図）

東半部の地山上で発見した東西２間以上、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。柱穴は６基検出しており、そのすべてで柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が北側柱列で総長4.42ｍ以上、柱間が西から2.26ｍ・2.16ｍ、南側柱列で総長4.33ｍ以上、柱間が西から2.17ｍ・2.16ｍである。梁行は西妻で3.74ｍである。方向は北側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約28度北に偏している。柱穴は径35～38㎝の楕円形であり、残存する深さは30～50㎝である。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、褐灰色粘質土、暗褐色土、にぶい黄褐色粘質土、黄褐色地山小ブロックが混入している。締まりは非常に強い。柱痕跡は径約15㎝の円形である。

遺物は、出土していない。

【ＳＢ1198掘立柱建物跡】（第17・30図）

東半部の地山上で発見した東西３間、南北１間の東西棟掘立柱建物である。ＳＢ1199・1207掘立柱建物跡と重複し、前者よりも古い。柱穴はすべて検出しており、そのうちの７基で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が北側柱列で総長5.60ｍ、柱間が西から1.83ｍ・3.77ｍ（２間分）、南側柱列で総長5.44ｍ、柱間が西から1.87ｍ・1.81ｍ・1.76ｍである。梁行は西妻が3.69ｍ、東妻が3.70ｍである。方向は北側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約31度北に偏している。柱穴は径30～40㎝の楕円形あるいは長辺20～35㎝の方形であり、残存する深さは20～40㎝である。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、暗褐色粘質土、明黄褐色地山小ブロックが多く混入している。締まりは強い。柱痕跡は径８～15㎝の円形である。

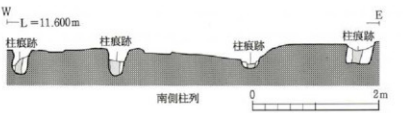


第30図　ＳＢ1198掘立柱建物跡断面図

遺物は出土していない。

【ＳＢ1199掘立柱建物跡】（第17・31図）

東半部の地山上で発見した東西３間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ1198・1207掘立柱建物跡と重複し、前者よりも新しい。柱穴はすべて検出しており、そのうちの７基で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が北側柱列で総長約5.8ｍ、柱間が西から1.87ｍ・2.13ｍ・約1.8ｍ、南側柱列で総長5.35ｍ、柱間が西から1.52ｍ・2.17ｍ・1.66ｍである。梁行は西妻が3.57ｍ、東妻が約3.6ｍである。方向は北側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約14度北に偏している。柱穴は径30～45㎝の楕円形あるいは長辺約40㎝の方形であり、残存する深さは10～50㎝である。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、明黄褐色地山小ブロックが多く混入し



第31図　ＳＢ1199掘立柱建物跡断面図

ている。柱痕跡は径10～15cmの円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ1200掘立柱建物跡】（第17図）

東半部の地山上で発見した東西１間以上、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ1197掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係については明らかでない。柱穴は４基検出しており、そのすべてで柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で2.57m以上、梁行は西妻で2.53mである。方向は北側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約30度北に偏している。柱穴は径30cm前後の楕円形あるいは一辺約30cmの方形であり、残存する深さは12～30cmである。埋土は黄灰色粘質土を主体とし、炭化物及び明黄褐色地山が粒状に若干混入している。締まりは強い。柱痕跡は径約15cmの円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＢ1207掘立柱建物跡】（第17図）

東半部の地山面で発見した東西２間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ1197・1198・1199掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は明らかでない。柱穴はすべて検出しているが、柱痕跡は確認できなかった。また、南側柱列は後世の攪乱によって上面を大きく削り取られており、検出面で北側と約40cmの高低差がある。平面規模は柱位置を柱穴の中心に想定すると、桁行が北側柱列で総長約5.9m、柱間が西から約3.1m・約2.8m、南側柱列で総長約5.5m、柱間が西から約2.8m・約2.7mである。梁行は西妻が約3.4m、東妻が約3.5mである。方向は北側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約13度北に偏している。柱穴は残存状況の良い北側柱列で長径45～50cmの楕円形あるいは同規模の不整形をしており、残存する深さは30～35cmである。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、明黄褐色地山小ブロックが多く混入している。

遺物は出土していない。

【ＳＢ1197掘立柱建物跡】（第17図）

東半部の地山面で発見した東西３間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ1207掘立柱建物跡、ＳＫ1222土壙と重複し、後者よりも古い。柱穴はすべて検出しているが、柱痕跡は確認できなかった。平面規模は柱位置を柱穴の中心に想定すると、桁行が北側柱列で総長約6.4m、柱間が西から約2.1m・約2.2m・約2.1m、南側柱列で総長約6.5m、柱間が西から約2.3m・約2.2m・約2.0mである。梁行は西妻で約3.8m、東妻で約3.9mである。方向は北側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約21度北に偏している。柱穴は長径40～50cmの楕円形あるいは一辺30～40cmの方形をしており、残存する深さは45～65cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、灰黄褐色粘質土、明黄褐色地山小ブロックが多量に混入している。締まりは強い。

遺物は出土していない。

【ＳＢ1196掘立柱建物跡】（第17図）

東半部の地山上で発見した東西３間、南北１間の東西棟掘立柱建物である。ＳＤ1188溝跡と重複し、それよりも新しい。柱穴はすべて検出しており、そのうちの２基で柱痕跡を確認した。また、本建物跡柱穴上面には黒褐色土を主体とする長径80～110cm、短径約40cmの長楕円形の浅い窪みがあり、柱穴本体はこれを掘り下げた後で検出した。平面規模は柱位置を柱穴の中心に想定すると、桁行が北側柱列で総長5.70m、柱間が西から約2.1m・約1.6m・約2.0m、南側柱列で総長約5.5m、柱間が西から約1.8m・約1.7m・

約2.0mである。梁行は西妻で約3.7m、東妻で約3.4mである。方向は北側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約29度北に偏している。柱穴は長径40～60cmの楕円形であり、残存する深さは25～55cmである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄褐色粘質土、明黄褐色地山小ブロックが多量に混入している。締まりは強い。柱痕跡は径約12cmの円形である。

遺物は出土していない。

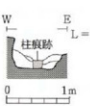
【ＳＢ1212掘立柱建物跡】（第17・37図）

中央部の地山上で発見した東西４間、南北１間の東西棟掘立柱建物跡である。西妻と北側柱列西から２間目にかけては、それぞれ１間分の張出しが付く。ＳＩ1203竪穴住居跡、ＳＫ1228土壙と重複し、それよりも新しい。柱穴はすべて検出しており、そのうちの13基で柱痕跡、１基で柱抜取穴を確認している。身舎の平面規模は桁行が北側柱列で総長8.84m、柱間が西から2.21m・2.24m・2.20m・2.19m、南側柱列で総長9.04m、柱間が西から4.55m（２間分）・4.49m（２間分）である。梁行は西妻で3.70m、東妻で3.99mである。北側の張出しは身舎より1.09～1.11mあり、総長5.68m、柱間が西から1.18m・2.47m・2.03mである。西側の張出しは身舎より0.82～1.18mあり、柱間は4.15mである。方向は身舎北側柱列で計ると、発掘基準線に対して西で約23度北に偏している。柱穴は長径20～35cmの楕円形または長辺35～40cmの方形であり、残存する深さは15～70cmほどである。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、にぶい黄褐色粘質土、オリーブ褐色土、明黄褐色地山小ブロックが多量に混入している。締まりは強い。柱痕跡は径10～16cmの円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＡ1220柱列跡】（第17・32図）

西半部で発見した南北２間の柱列跡である。ＳＩ1202竪穴住居跡、ＳＤ1194溝跡と重複し、前者より新しく、後者よりも古い。検出した柱穴のうち、２基で柱痕跡を、１基で柱抜取穴を確認した。規模は総長約4.1mであり、柱間は北側から１間分が1.95mである。方向は発掘基準線に対して、北で約24度東に偏している。柱穴は一辺約90cmの方形であり、残存する深さは20～50cmである。埋土はにぶい黄褐色粘質土が主体であり、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土、明黄褐色地山ブロックが多量に混入している。締まりは強い。柱痕跡は径20cm前後の円形である。



第32図　ＳＡ1220北端柱穴

遺物は出土していない。

【ＳＡ1248柱列跡】（第17図）

中央部の地山上で発見した南北２間の柱列跡である。ＳＩ1246竪穴住居跡、ＳＫ1228と重複し、ＳＩ1246竪穴住居跡よりも新しく、ＳＫ1228よりも古い。北端部柱穴は大部分が後世の撹乱によって破壊されている。検出した柱穴のうち、１基で柱痕跡を確認した。規模は総長約6.4mと推測される。方向についても明確には示し得ないが、発掘基準線に対して北で約33度前後東に偏していると考えられる。柱穴は一辺70～100cmの方形であり、残存する深さは約30cmである。埋土は黄褐色粘質土を主体とし、暗褐色粘質土、明黄褐色地山ブロックが多量に混入している。締まりは強い。柱痕跡は径20cmの円形である。

遺物は出土していない。

【ＳＡ1249柱列跡】（第17・33図）

中央部の地山上で発見した東西４間の柱列跡である。ＳＢ1212掘立柱建物跡、ＳＫ1228土壙、ＳＡ1248柱列跡と重複し、ＳＢ1212掘立柱建物跡、ＳＫ1228土壙よりも新しい。３基の柱穴で柱痕跡を、２基の柱穴で柱抜取穴を確認した。柱抜取穴の中心に柱位置を想定すると、規模は総長約8.9ｍであり、柱間は西から約2.5ｍ・2.20ｍ・約2.1ｍ・約2.1ｍである。方向は発掘基準線に対して、西で約22度北に偏している。柱穴は長辺35～40㎝の方形であり、残存する深さは約22～50㎝である。埋土は黒褐色粘質土が主体であり、オリーブ褐色土、明黄褐色地山小ブロックが混入している。締まりは強い。柱痕跡は径10～15㎝の円形である。

実寸

番号	種　別	径	登録番号
1	永楽通宝	2.5	19
2	永楽通宝	2.4	11
3	永楽通宝	2.4	12

第33図　ＳＡ1249柱列西より２間目横穴出土遺物

遺物は、西から２間目の柱穴から永楽通宝３枚、不明銭１枚が出土している。

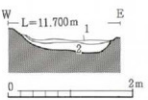
【ＳＤ1188溝跡】（第17・38図）

東半部で発見した東西方向の溝跡である。ＳＢ1196掘立柱建物跡と重複し、それよりも古い。規模は長さ約4.7ｍ、上幅40～85㎝、下幅20～40㎝、深さ４～８㎝である。方向は発掘基準線に対して、西で約29度北に偏している。埋土は１層であり、黒褐色粘質土を主体としている。

遺物は、龍泉窯系青磁碗（図版38－２）が出土している。

【ＳＤ1194溝跡】（第17・34・35図）

西半部で発見した南北方向の構跡である。ＳＡ1220柱列跡と重複し、それよりも新しい。規模は長さ6.3ｍ以上、上幅1.4～1.5ｍ、下幅0.8～1.1ｍ、深さ12～28㎝である。方向は発掘基準線に対して、北で約24度東に偏している。埋土は２層に区別することができる。１層が黒色土、２層が褐色粘質土であり、１層には炭化物が小ブロック状に多量に混入している。



第34図　ＳＤ1194溝跡断面図

実寸

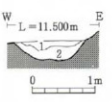
番号	種　別	径	登録番号
1	元豊通宝	2.4	10

第35図　ＳＤ1194溝跡出土遺物

遺物は、第１層より元豊通宝１枚が出土している。

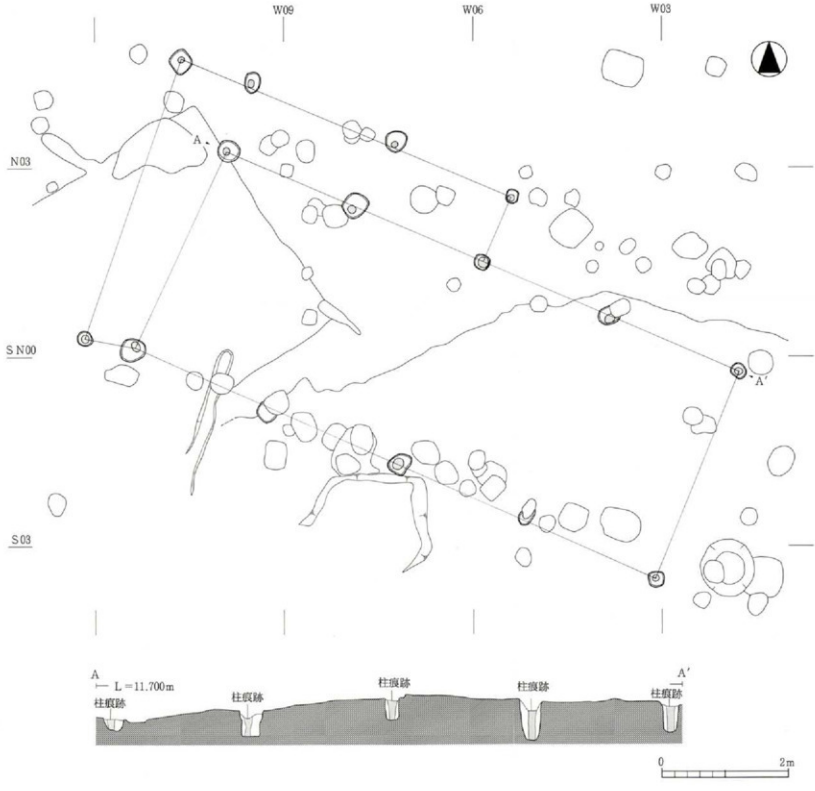
【ＳＤ1209溝跡】（第17図・36図）

Ⅱ区西半部で発見した南北方向の溝跡である。ＳＩ1202竪穴住居跡と重複し、それよりも新しい。規模は長さ10.6ｍ以上、上幅0.65～1.3ｍ、下幅40～60㎝、深さ25～36㎝である。方向は発掘基準線に対して、北で約36度東に偏している。埋土は２層に区別することができる。共に黒褐色土を主体としており、１層には炭化物が多く含まれている。



遺物は、平瓦ＩＡ類、丸瓦ⅡＢ類が出土している。

第36図　ＳＤ1209 遺構断面図



第37図　ＳＢ1212掘立柱建物跡平面図・断面図

【ＳＤ1210溝跡】（第17図）

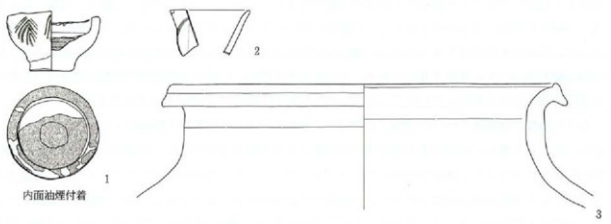
Ⅱ区西半部で発見した南北方向の溝跡である。ＳＩ1186竪穴住居跡と重複し、それよりも新しい。規模は長さ7.4ｍ以上、上幅55～70㎝、下幅20～40㎝、深さ２～18㎝である。方向は発掘基準線に対して、北で約34度東に偏している。埋土は１層であり、暗褐色土を主体としている。

遺物は、平瓦ＩＡ類・ⅡＢ類、丸瓦Ⅱ類が出土している。

【ＳＫ1288土壙】（第17・27図）

中央部で発見した不整形の土壙である。ＳＩ1246竪穴住居跡、ＳＢ1212掘立柱建物跡、ＳＡ1248・1249柱列跡と重複し、ＳＩ1246竪穴住居跡、ＳＡ1248柱列跡より新しく、ＳＢ1212掘立柱建物跡、ＳＡ1249柱列跡よりも古い。平面形は不整形であり、東西約10ｍ、南北5.5ｍ以上、深さ0.1～0.15ｍである。埋土はにぶい黄褐色土を主体とし、地山、炭化物が多量に混入する人為堆積である。

遺物は、無釉陶器甕の体部破片が出土している。



その他の遺物（Ⅱ区小柱穴）

番号	種別	層位	口径	底径	器高	特徴	登録番号
1	施釉陶器・花瓶	小柱穴				灯明皿に転用	8
2	青磁・碗	ＳＤ1188				大宰府編年 Ⅰ８－ｂ	9
3	無釉陶器・甕	小柱穴	(32.4)				11

第38図　Ⅱ区　溝・小柱穴出土遺物

Ⅳ 考　　察

今回の調査では竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡９棟、柱列３条、溝跡11条、その他土壙や多数の小柱穴を発見した。これらは出土した遺物や遺構の新旧関係より、(1) 古墳時代、(2) 奈良・平安時代、(3)中世以降に大別することができる。以下では、時代別に年代を検討し、その後これらの遺構の性格について若干の考察を加える。

１．遺構の年代

(1) 古墳時代

Ⅱ区西半部で発見した、ＳＩ1202・1203・1244竪穴住居跡がある。

ＳＩ1202竪穴住居跡では、床面から非ロクロ調整の土師器甕が出土している。口縁部と体部の境に段が認められ、口縁部は短く外反する。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面が縦方向のハケメである。一方、堆積土１層からも非ロクロ調整の土師器杯・甕が出土している。このうち杯は、口縁部と体部の境に段を有し口縁部が垂直に立ちあがるものと、口縁部が外反して立ち上がるものがある。器面調整は口縁部がヨコナデ、段より下がヘラケズリである。甕は小型のものであり、口縁部と体部の境に段が認められ、体部外面に縦方向のハケメを施すものである。このような土器は、いずれも古墳時代後期に位置付けられている栗囲式期のものと類似していることから、ＳＩ1202住居跡もその頃のものであると考えられる。

ＳＩ1203竪穴住居跡では、床面および堆積土１層から非ロクロ調整の土師器杯・甕が出土している。床面から出土した甕は、体部の最大径がほぼ中央部にある球形のものである。口縁部は短く外反し、器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がハケメ・ヘラミガキ・ナデ、体部内面がヘラナデである。堆積土１層から出土した土師器杯は体部が内湾し、口縁部がやや内側に傾くものである。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部内・外面がヘラミガキである。このような土器は古墳時代中期に位置付けられている南小泉式期の土器群に見られるものであり、床面から出土した甕の特徴はより古い様相を示すとされる山王遺跡八幡地区ＳＸ230遺物包含層出土土器（註１）や同西町浦地区ＳＸ058遺構出土土器（註２）のものと類似している。ただし、本住居では出土した遺物の器種が少なく比較できる資料に限界があるため、ここでは大きく古墳時代中期の年代で捉えておきたい。

ＳＩ1244竪穴住居跡については、栗囲式期としたＳＩ1202竪穴住居跡よりも古いことから、それ以前のものである。

(2) 奈良・平安時代

Ⅰ区のＳＩ1208・1211・1235竪穴住居跡、Ⅱ区のＳＩ1186、1246竪穴住居跡、ＳＢ1187掘立柱建物跡、ＳＡ1220・1248柱列跡がある。このうち竪穴住居跡では出土した土師器のほとんどが非ロクロ調整のものであることから、いずれも８世紀代におさまるものと考えられる。

【竪穴住居】

ＳＩ1208竪穴住居跡では、床面直上の４層および周溝内から非ロクロ調整の土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕が出土している。須恵器杯では底部の特徴が明らかなものが９点あり、その内訳はヘラ切り無調整のものが２点、ヘラ切り後手持ちヘラケズリが施されたものが４点、ヘラ切り後底部周縁に回転ヘラケズリが施されたものが１点、全面に手持ちヘラケズリが施されたものが１点、全面に回転ヘラケズリ

が施されたものが1点である。底部の切り離しはすべてヘラ切りに限られており、再調整が施される割合が半数以上を占めている。また、口径に対する底径の比率をみると60%を超えるものが多い。本遺跡周辺でこのような特徴を持つ須恵器杯は、山王遺跡八幡地区ＳＤ180Ｂ溝跡出土土器(註3)、同伏石地区ＳＤ677溝跡出土土器(註4)に類例があり、ともに8世紀中葉頃の年代が与えられている。したがって、本住居跡についても同様の年代が考えられる。

ＳＩ1235竪穴住居跡は、8世紀中葉頃としたＳＩ1208竪穴住居跡と重複しそれよりも新しい住居跡である。遺物は床面から須恵器杯、堆積土1層から非ロクロ調整の土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土している。このうち須恵器杯ではヘラ切り無調整のものが主体を占めており、再調整が施されるものは少ない。また、堆積土出土の土師器にロクロ調整のものが全く含まれないことから、9世紀には下らないものと考えられる。したがって、本住居跡の年代は8世紀後葉頃であると推測される。

ＳＩ1211竪穴住居跡では、周溝およびＳＤ1214外延溝から非ロクロ調整の土師器杯・甕が出土しており、外延溝出土の土師器杯には体部外面に段が確認できる。体部外面に段を形成する土師器杯は8世紀中葉頃の年代が与えられている山王遺跡八幡地区ＳＤ180Ｂ出土土器や伏石地区ＳＤ677溝跡出土土器に確認できることから、本住居跡の年代もその頃のものと考えておきたい。

ＳＩ1186竪穴住居跡では周溝および堆積土1・2層から非ロクロ調整の土師器杯・甕、ロクロ調整の土師器甕、須恵器杯・高台付杯・甕・甑が出土している。住居跡の残存状況から判断すると、堆積土1・2層は住居廃絶後さほど時間を経過しないうち堆積したものと考えられることから、これらの土器は住居廃絶時の年代を反映するものと考えられる。土師器杯はいずれも底部平底のものであり、体部には段や沈線などは認められない。甕は非ロクロ調整のものが主体を占めるが、内面に回転ハケメを施したロクロ調整のものも数点認められる。須恵器杯ではヘラ切りのものが1点認められる。このうち土師器杯の特徴をみると、8世紀中葉頃とされている山王遺跡八幡地区ＳＤ180Ｂ出土土器などよりは新しく、国分寺下層式期末頃とされる名取市清水遺跡第58号住居跡出土土器(註5)と類似する。したがって、本住居跡出土土器の年代については8世紀後葉～末頃であると考えられ、住居跡についても概ね同様の年代が推測される。

ＳＩ1246竪穴住居跡では、堆積土1層から非ロクロ調整の土師器杯・甕・甑が出土している。このうち土師器杯は平底で体部に段や沈線は認められず、ＳＩ1186住居跡のものと類似する。したがって、本住居跡の年代については8世紀後葉～末頃のものと考えておきたい。

【掘立柱建物跡・柱列跡】

ＳＢ1187掘立柱建物跡とＳＡ1220・1248柱列跡がある。いずれも方向をほぼ揃えていることや、柱穴の規模が一辺60㎝以上の方形を基調とし黄褐色の粘質土に地山ブロックが多量に混入することなどから、同時期に存在していた可能性が高い。年代は、ＳＡ1248が新旧関係で8世紀後葉～末頃としたＳＩ1246竪穴住居跡より新しいことから、9世紀以降であると考えられる。

(3) 中　世

Ⅰ区で検出したＳＤ1206溝跡、Ⅱ区で検出したＳＢ1195・1196・1197・1198・1199・1200・1207・1212掘立柱建物跡、ＳＡ1249柱列跡、ＳＤ1194・1209・1188溝跡、ＳＫ1228土壙、Ⅲ区で検出したＳＤ1230溝跡がある。

【掘立柱建物跡・柱列跡】

いずれも円形および楕円形を基とした径30～40㎝の柱穴であり、埋土は黒褐色主体の粘質土に地山小ブ

ロックが若干混入している。柱列の方向より、以下のａ群、ｂ群、ｃ群に細分できる。

ａ群：発掘基準線に対して西で30度以上北に傾くのも　ＳＢ1198・1200

ｂ群：発掘基準線に対して西で20～30度北に傾くもの　ＳＢ1195・1196・1197・1212・ＳＡ1249

ｃ群：発掘基準線に対して西で10～20度北に傾くもの　ＳＢ1199・1207

これらの重複関係については、ＳＢ1198（ａ群）→ＳＢ1199（ｃ群）、ＳＢ1212（ｂ群）→ＳＡ1249（ｂ群）が判明しているものの、それ以外については明らかでない。

年代についてみると、**ＳＡ1249柱列跡**は、西から２間目の柱穴から「永楽通宝」（初鋳1408年）が３点出土しており、15世紀以降であると考えられる。**ＳＢ1212掘立柱建物跡**は新旧関係でＳＡ1249よりも古いことから、それ以前のものである。**ＳＢ1196・1207掘立柱建物跡**は13世紀以降のＳＤ1188と重複し、それよりも新しいことから、それ以降であると推測される。その他の建物跡については、出土遺物がなく他の遺構との重複関係もないことから、年代を明らかにすることはできなかった。しかし、円形、楕円形を基調とした小形の柱穴は中世以降の建物跡に多く認められるものであり、さらに各柱穴から出土した遺物に近世以降のものが全く含まれていないことから、ここでは概ね中世のものと捉えておきたい。

【溝跡】

ＳＤ1194溝跡は中世の建物群とおおよそ方向を揃えていることや「元豊通寶」（初鋳1078年）が出土していることなどから、中世の範疇と捉えることができる。**ＳＤ1209溝跡**も埋土や規模、方向がＳＤ1194と類似することから、それと同時期のものと考えておきたい。**ＳＤ1230溝跡**からは常滑窯の偏年（註６）で６ａ型式のものと類似する無釉陶器鉢が出土しており、13世紀中葉以降の年代が推測される。**ＳＤ1188溝跡**からは大宰府偏年（註７）のⅠ-５ｂと類似する龍泉窯系青磁碗が出土していることから、13世紀初頭～前半以降の年代が考えられる。**ＳＤ1206溝跡**からは無釉陶器甕が出土しており、中世以降のものと推測できる。

【土壙】

ＳＫ1228土壙からは無釉陶器甕の体部破片が出土している。遺構の新旧関係で15世紀以降としたＳＡ1249やそれ以前としたＳＢ1212よりも古いことから、ここでは15世紀以前のものと考えておきたい。

２．遺構の性格

【竪穴住居跡】

出土遺物から性格が推測されるものには、ＳＩ1186・1203・1211・1235竪穴住居跡がある。

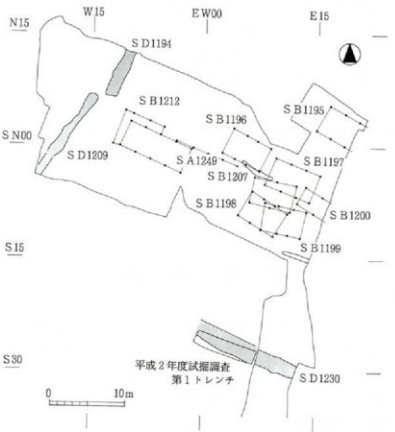
ＳＩ1203は古墳時代中期の住居跡である。遺物は土師器のほかに石製模造品の円盤・剣・勾玉が各１点、臼玉が32点（内18点が土師器甕の内面に付着）、模造品の原石２点、未製品３点、剥片20点以上が出土している。同時期の住居跡から模造品および原石、未製品等が出土した例は、本遺跡西側に位置する山王遺跡西町裏地区のＳＩ070・071住居跡（註８）がある。ＳＩ070からは、石製模造品の円板３点、臼玉１点のほかに未製品や砥石が出土しており、ＳＩ071からは模造品の原石となる滑石と剥片が出土している。これらの住居は石製模造品の工房跡と考えられていることから、本住居跡についても同様の工房であったと推測される。

ＳＩ1186・1211・1235は８世紀中葉および後葉頃の住居跡である。ＳＩ1186・1211では周溝底面から漆付着土器が出土している。ＳＩ1186出土のものは須恵器壷の口縁部～体部の破片であり、ＳＩ1211出土の

ものは土師器甕である。いずれも内面全体に多量の漆が付着しており、漆容器として使用されたものと考えられる。ＳＩ1235では床面直上からほぼ半円の状態で漆紙が出土している。本調査区周辺では、高崎遺跡弥勒地区、市川橋遺跡水入地区、同浮島地区、山王遺跡八幡地区などで漆紙文書や漆付着土器が多く出土している。このうち高崎遺跡弥勒地区では９世紀後半頃の竪穴住居跡から漆紙文書が出土しており、漆工房の可能性が指摘されている。一方、市川橋遺跡浮島・水入地区や山王遺跡八幡地区では、溝跡や土壙から漆紙文書や漆付着土器など多くの漆関連の遺物が出土しており、周辺に漆工房の存在が推測されている。今回発見したＳＩ1186・1211・1235住居跡については、漆紙や漆付着土器が住居の床面および周溝底面より出土していることから、弥勒地区で発見された住居跡同様漆塗りの工房であったと考えられる。

【中世の遺構】（第39図）

掘立柱建物跡８棟と溝跡を発見した。このうち溝跡についてみると、ＳＤ1194・1209は発掘基準線に対する中心線の傾きが北で25～35度東に傾いており、ＳＤ1230はそれらと直交している。このような傾きは建物跡ａ・ｂ群と共通していることから、ＳＤ1194・1209・1230はこれらの建物跡を区画する区画溝であると考えられる。区画の範囲については、北側にある谷状の落ちを北端と捉えれば南北約35ｍ、東西は40ｍ以上になる。このうち、南北方向の区画溝であるＳＤ1194とＳＤ1209は、溝が接しないよう東西に約２ｍずらして幅１ｍほどの通路を設けている。区画内の遺構についてはほとんどが建物跡である。建物の規模はＳＢ1212が桁行４間、梁行１間で北と西に張り出しが付く以外は、すべて桁行３間、梁行１間の東西棟である。配置については前者が区画の西端付近にあるのに対し、後者はⅡ区東半部に集中している。



第39図　中世の遺構模式図

なお、これらの建物跡には数時期の変遷が考えられるが、今回の調査でそれらの年代を明らかにすることはできなかった。

次に、居住者の階層について若干の検討を行ってみたい。高崎地区に関する文献資料をみると、『留守家文書』「足利尊氏御判御教書」には文和元年（1352年）岩切領主留守家持に対して、「陸奥国宮城郡内余目郷岩切・高崎・椿・荒居等村…（中略）、相傳當知行之上、致忠節云々者領掌不可有相違之状、如件」とし岩切・高崎等の旧領安堵の沙汰を下している記録がみられる。また、延文元年（1356年）の「斯波直持施行状」では「留守參河松法師丸申、宮城郡内余目郷岩切・高崎・荒居并新宿・新道・椿村南宮庄内田在家事、任安堵状、氏家彦十郎相共、止八幡介押領、可沙汰付下地於道即之状、如件」とあり、八幡氏が留守氏の所領を押領していたことが記載されている。一方、『平姓八幡氏系譜』には「寛正六年四月居於宮城群高崎村因以為氏号」とあり、寛正６年（1465年）に八幡氏の分家にあたる彦三郎盛忠が高崎村に居住し、「高崎」姓を名乗ったことが記されている。高崎氏の居住していた場所は本調査区の西側約150ｍの地点にある「館屋敷」と呼ばれる一帯であると推定されており、現在でも土塁や空堀などが確認できる。今回発見した遺構については、周囲に南北約35ｍ、東西40ｍ以上の溝を巡らせた屋敷跡であると考えられることや、数は少ないものの輸入陶磁や施釉陶器、茶臼（註９）などが出土している。このことから、居住者については武士階級であったと考えられ、文献資料に見られる八幡氏あるいは高崎氏と関係があった可能性が高い。

註１：宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅰ』 宮城県文化材調査報告書第161集

註２：多賀城市教育委員会『山王・高崎遺跡発掘調査概報』 多賀城市文化財調査報告書第２集 1981

註３：多賀城市埋蔵文化財調査センター他『山王遺跡』－第10次発掘調査概報－多賀城市文化財調査報告書第27集 1991

註４：宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅴ』－多賀前地区考察編－宮城県文化財調査報告書第147集 1997

註５：宮城県教育委員会「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』 宮城県文化材調査報告書第77集 1981

註６：中野晴久「赤羽・中野 生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』1994

註７：山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995

註８：註２に同じ

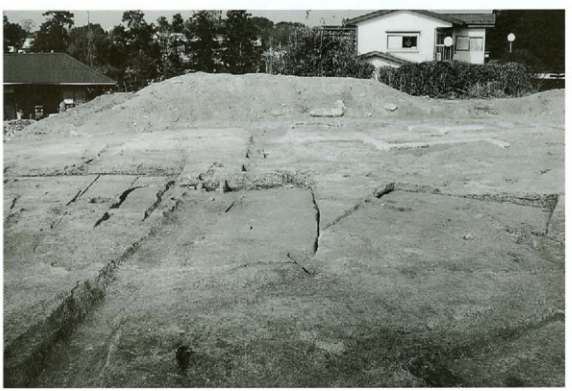
註９：多賀城市埋蔵文化財調査センター「高崎遺跡試掘調査」『年報５』 多賀城市文化財調査報告書第28集 1992

Ⅴ ま と め

1．今回の調査では竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡９棟、柱列跡３条のほか、溝跡、土壙などを発見した。

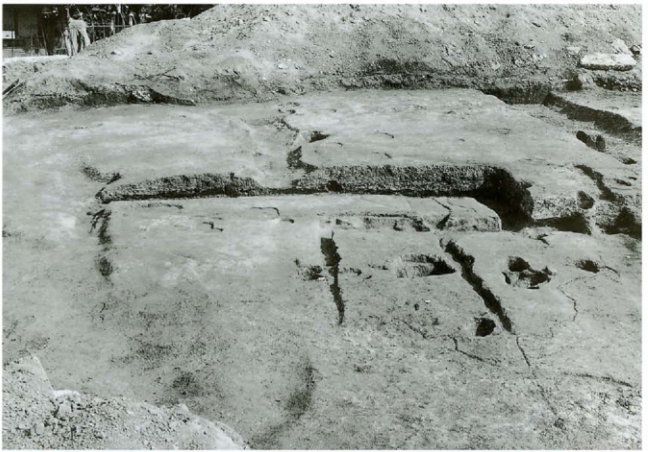
2．竪穴住居跡のうち古墳時代中期のＳＩ1203は石製模造品の工房跡、８世紀中葉および後葉頃のＳＩ1186・1211・1235は漆工房跡であると考えられる。

3．中世の掘立柱建物跡については、南北方向のＳＤ1194・1209溝跡、東西方向のＳＤ1230溝跡によって区画された武士階級の屋敷跡であったと考えられる。



上：Ⅱ区　全景（西より）

下：Ⅱ区　西半部竪穴住居（西より）



上：ＳＩ1186（南より）

下：ＳＩ1186 周溝　漆付着土器出土状況

上：ＳＩ1202（南より）

下：ＳＩ1202 カマド中央部

上：ＳＩ1203（東より）

中：ＳＩ1203 北西隅遺物出土状況

下：ＳＩ1203 北西隅遺物出土状況

上：ＳＩ1246（東より）

下：ＳＩ1246 北東部主柱穴断面

上：Ⅱ区東半部建物群　（南より）

中：ＳＢ1187　　（南より）

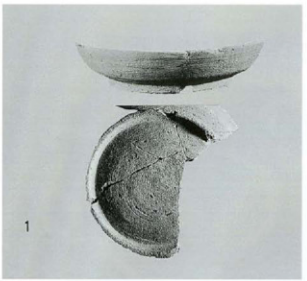
下：ＳＢ1187 柱穴断面

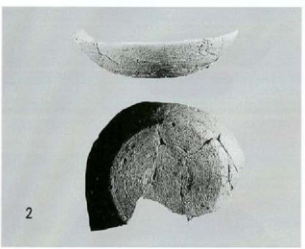
上：Ⅰ区　全景（北より）

下：ＳＩ1208 カマド検出状況

上：ＳＩ1211 北半部（西より）

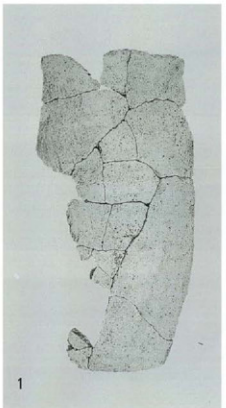
下：ＳＩ1211 周溝北東隅
周溝がトンネル状に掘られており、
ＳＤ1214と連結する

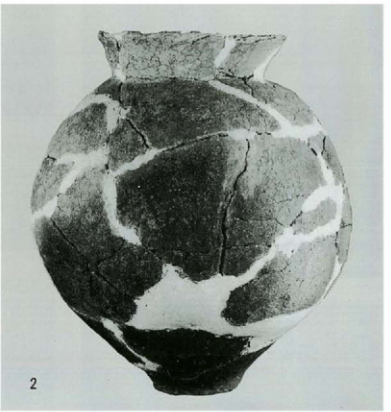


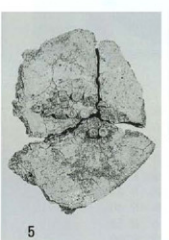


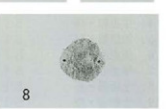
1．須恵器・高台付杯　S I 1208　R 35
2．須恵器・杯　S I 1235　R 42
3．須恵器・杯　S I 1208　R 27
4．須恵器・杯　S I 1235　R 5
5．須恵器・杯　S I 1235　R 6
6．須恵器・杯　S I 1208　R 33
7．須恵器・杯　S I 1235　R 40
8．土師器・杯　S I 1186　R 59
9．土師器・甕　S I 1186　R300

S：⅓









1．土師器・甕　　S I 1246　R69
2．土師器・甕　　S I 1203　R67
3．土師器・甕　　S I 1211　R 1
4．漆付着土器　　S I 1186　R 3
5．土師器甕の内面に付着した臼玉
　　S I 1203　R171～187
6．石製模造品　勾玉　S I 1203　R24
7．石製模造品　剣　　S I 1203　R23
8．石製模造品　円盤　S I 1203　R22　　S：⅓

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせき
書名	高崎遺跡
副書名	第17次調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第61集
編著者名	武田健市
編集機関	多賀城市埋蔵文化財センター
所在地	〒985－0873　宮城県多賀城市中央二丁目27番1号　TEL022－368－0134
発行年月日	西暦2001年2月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	期間調査	調査面積	調査原因
高崎遺跡	多賀城市 高崎	042099	18018	38度 17分 26秒	140度 59分 58秒	19960105 ～ 19960315	1,700㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高崎遺跡	集落	古墳 奈良・平安 中世	竪穴住居 掘立柱建物 区画溝	土師器、須恵器 漆付着土器 石製模造品	5世紀の石製模造品 工房跡と8世紀の漆 工房跡を発見

多賀城市文化財調査報告書第61集

高　崎　遺　跡

－第17次調査報告書－

平成13年２月発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番１号
電話（022）３６８－０１３４

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目１番１号
電話（022）３６８－１１４１

印刷　有限会社　工　陽　社
塩釜市尾島町８番７号
電話（022）３６５－１１５１